教育実践研究　第33集（2023）169－174

［特別活動］

他者と関わり合いながら，協力して活動する力を高める集団づくり
－「班替え」の取組を通して－

笛木　淳平*

1　はじめに

(1) 主題設定の理由

学級は，多様な生活経験をもった子どもたちが偶然の縁で集まる場である。だからこそ，他者と話し合ったり，折り合いを付けたりしながら，協力して活動することの大切さを実践的に学ぶことができる絶好の場になると私は考える。小学校学習指導要領解説特別活動編の学級活動の目標には，「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見いだし，解決するために話し合い，合意形成し，役割を分担して協力して実践」することが明記されている。このことから，特に学級活動の時間において，「学級の課題を見いだし，他者との話し合いや合意形成を経て，協力して実践するという学習過程」（以下，「自治活動のサイクル」とする。）を積み重ねることが重視されていると捉えている。

「自治活動のサイクル」を確立することに関して，中学校における荒木（2020）の先行研究がある。荒木は，班会議や班長会を通して学級の諸問題の解決を目指したり，合唱コンクールに向けてパートごとにミーティングを行ったりする等，小集団を生かした自治活動に取り組み，成果を挙げている。

本実践では，中学校における荒木の実践を参考にしながら，小学校６年生を対象に，「班」を生かして実践をしようと考えた。学級の中に年間を通して存在する小集団の「班」を基盤にし，学級活動の目標がねらっている「課題を見いだす」「話し合う」「合意形成を図る」「協力して実践する」「振り返る」という「自治活動のサイクル」をまわしていく。その過程を通して，他者と関わり合いながら協力して活動する力を高めていきたいと考えた。今回は，班を生かして「自治活動のサイクル」をまわしていくこの一連の取組を「班替え」と定義し，その有効性について検証する。

(2)「班替え」について

①　筆者が考える「席替え」と「班替え」

・席替え：自分の座る座席を変える。→ **個人に着目し，一時的なもの。**
・班替え：ねらいに基づいて，一緒に生活する班のメンバーを変える。そして，具体的な取組を通して，ねらいの達成を目指す。→ **学級集団の状態に着目し，取組を通して発展していくもの。**

毎年，４月後半になると子どもたちから「席替えはいつするのですか。」と声を掛けてくることが多い。子どもたちにとって，「席替え」は魅力的で重要な活動だと推測できる。「席替え」に関して，郷田（2014）は，子どもたちの仲を深め，自治的な活動を促進するというねらいに向けて，席替え・班替えの方法を選ぶことが重要だと述べている。そして，くじ引きでランダムに席を決める方法，教師が席を指定する方法，班長が話し合いによって席を決める方法等を提案している。また，久下（2022）は，席替えの主導権を教師から子どもたちに委譲することを提案している。そして，子どもたちが互いの事情を考え，対話しながら自分たちで席を決めることで，子どもたち同士の関係性を深めることができるのではないかと述べている。しかし，いずれも「席替え」の方法にとどまり，「席替え」の後に子どもたちの関係性をどのように深めていくのかという具体的な記述は見られない。

そこで，「席替え」のように一過性のイベント的活動で終わらせるのではなく，教師が明確なねらいをもち，１年間の集団づくりの核となる発展性がある活動にしたいと考え，「班替え」を実践することにした。

②　「班替え」の取組の基本的な流れ（年間を通して，以下の１～７を繰り返す。）

「班替え」の取組の基本的な流れについては，筆者が自身のこれまでの集団づくりの実践を通して，修正を加えながら形にしていったものである。特に，その時期の学級の課題や学校行事等を踏まえて，班を単位として具体的に協力で

*南魚沼市立北辰小学校

きる取組を設定し，話し合い，実践し，振り返るという「自治活動のサイクル」をまわすことを重視した。

1　「班替え」の原案の作成【課題を見いだす】
・学級の課題を踏まえて，「班替え」のねらい，班の人数，班のメンバーの決め方について原案を作成する。
・原案の作成者は，担任や班長会等，学級集団の発達に応じて変更していくことができる。
2　「班替え」のしかたについての学級会の実施【話し合う，合意形成を図る】
・学級全体に「班替え」の原案を提示する。必要に応じて修正意見を加え，学級全体で合意形成を図る。
3　班のメンバー，班の位置，座席の位置，班当番の決定【話し合う，合意形成を図る】
・メンバーの決め方は，担任が決める，くじ引き，班長会が決定，全員で話し合って決定等，様々ある。
・そのときの「班替え」のねらいや，学級の実態にふさわしい方法を選択する。
・班の位置や，座席の位置，班当番は，話し合って決めることを原則とする。
4　班長会の実施【課題を見いだす】
・班の様子を確認したり，班で協力して取り組む活動の原案を作成したりする。
5　取組についての学級会の実施【話し合う，合意形成を図る】
6　班単位で取組を実施【協力して実践する】
・その時期の学級の課題や学校行事等を踏まえて，班を単位としてできる取組を行う。（1～2週間程度）
7　取組の総括【話し合う，課題を見いだす】
・班ごとに取組の振り返りを行い，成果と課題を出し合う。（取組が達成できたら，お楽しみ会を行う。）

2　研究の目的

「班替え」の取組が，他者と関わり合いながら，協力して活動する力を高める集団づくりに有効かどうか検証する。

3　研究の対象と方法

(1) 調査対象

第6学年1組　男子11人，女子14人，合計25人（筆者が令和3年度に担任をした学級）

(2) 検証の方法

Q－U調査の結果（5月と11月），「班替え」に関する質問紙調査（5月と3月），振り返りの記述内容を分析する。

4　指導の実際

(1) 班の組織について

クラスの男女比を踏まえて，男女混合6～7人班，4班編成を基本とした。男子や女子が1人だけの班や，男子だけの班，女子だけの班をつくらないように配慮した。1年間を通して，合計8回の「班替え」を行った。本研究では，より重点的に取り組んだ「第3回班」「第5回班」「第7回班」の取組の様子について，詳しく述べることとする。

表1　1年間の「班替え」の概要

	期　間	ねらい
第1回班	4月	班のメンバーで協力して，当番活動を進めよう。～班当番の取組を始めよう～
第2回班	5月	班のメンバーで声を掛け合い，自律した生活を目指そう。
第3回班	**6月**	**自分たちで話し合い，折り合いを付けながら班をつくろう。協力する力を高めよう。**
第4回班	7月	誰とでも関わる力を伸ばそう。～班でポイントをためよう～
第5回班	**9月**	**自律の力を伸ばそう。～マラソンチャレンジに力を合わせて取り組もう～**
第6回班	10月	たくさんの人と関わり，その人のよさを見付けよう。～よいところ探し～
第7回班	**11月～**	**みんなで教え合い，チャレンジテストで高得点を目指そう。～チャレテスチャレンジ～**
第8回班	1月～	クラスの団結をさらに高めよう ～チャレテスチャレンジリベンジ～

(2)「班替え」に向けた素地づくり

学級開きの日に，「お互いに協力することの大切さを学んでほしい。」「他者と関わり合うことで気付けることがある。」という担任としての思いを語り，1年間を通して，班活動を軸にして学習や生活を行っていくことを子どもたちに伝えた。そして，班のメンバーで協力する必要がある班対抗ゲームを行った。ゲームをする中で，すぐに机を合わせ

て相談する班や，班のメンバー全員の意見を取り入れようとしている子どもの姿を価値付けた。班対抗ゲームは，１年間を通して繰り返し行い，よりよい関わり方を確認していった。また，班を単位に当番活動に取り組んだ。当番活動を進めるために班で話し合う機会をつくったり，困っている人をフォローする姿が自然と出てきたりすることを期待したからである。子どもたちと話し合い，黒板，配り，給食・学習，環境の４つの班当番が組織された。

(3) 第３回班 修学旅行を見据えた「班替え」～全員発言運動～【６月】

① ねらい：自分たちで話し合い，折り合いを付けながら班をつくろう。協力する力を高めよう。
② 班のメンバーの決め方：男女別に分かれての話し合い。その後，男女の組み合わせを話し合う。
③ 班長の決め方：班内互選。

６月の修学旅行に向けて，修学旅行の活動班と教室での班活動を連動させることができないかと考えた。そこで，第２回班の班長会を開き，「修学旅行の活動班は，どうやって決めたい？」と聞いてみた。すると，班長たちは「一生に一度なので，自分たちで話し合って決めたい。」と答えた。そこで，「話し合って決めるのはいいのだけれど，せっかく話し合って班をつくるなら，修学旅行の当日だけ活動するのはもったいないんじゃない。第３回班と活動班を同じメンバーにすることで，日頃から協力の質を高めて，修学旅行でその協力の成果を発揮してくるのはどう？」と問い掛けた。班長会のメンバーは全員がこの意見に賛成だったので，早速第３回班の「班替え」の原案を作成した。具体的には，男子と女子に分かれて話し合って班のメンバーを決定することとした。この原案を学級会で提案したら，反対意見は出なかった。満場一致で班長会の原案が可決された。

男子と女子はそれぞれ「決め方を決める」ところから話し合っていた。男子は，「第２回班の人とは分かれよう。２人班がいい人と，３人班がいい人の意見を聞いていこう。」，女子は，「できるだけ今の班の人と同じにならないようにしよう。どの班でもいいよって人はいる？」等，一人一人の希望を聞き出していた。そして，男女ともに，メンバーを決定する直前には「納得していない人はいない？」という声が出ており，丁寧に合意形成を図ろうとする様子が見られた。初めての取組だったが，男女ともに20分で班のメンバーを決定することができた。班内互選で班長を選出したり，班当番を決めたりして，第３回班の活動がスタートした。その後，第３回班の班長会を開いた。そこで，班のメンバーで協力する力を高めるための取組の原案づくりを行った。班長会で学級の課題を話し合うと，「授業中に発言をする人が決まっている。」「話し合いの時に男女で分かれてしまうことがある。」という意見が出てきた。そこで，「班のメンバーで教え合いながら学習し，一人一人が自分の考えを授業中に発表できるようになろう。」という思いをこめて，「全員発言運動」という取組を考えた。全員発言運動の概要は，以下のとおりである。

・期間は，６月７日（月）～18日（金）までの10日間。
・１日の中で，班のメンバー全員が発言したらシールを１枚もらうことができる。
・班で目標枚数を決めて，その目標枚数以上のシールを集めることができたらクリア。

上記の内容で原案を作成し，班長会が学級会で提案した。班で目標枚数を決めることに関して，「簡単にクリアできる目標を設定しても協力する力は高まらないから，最低でも５枚以上にするという条件を入れたらどうか。」という修正案が出された。実際の取組では，それまで以上に班ごとに声を掛け合いながら学習に取り組む姿が見られるようになった。10日間の取組を終えて，全ての班が目標枚数以上のシールを集めることができた。活動後の振り返りでは，成果と課題を話し合ったり，各班のＭＶＰを決めたりした。そして，目標達成お祝いの会として，水鉄砲や水風船を使って楽しむ「サマーフェスティバル」を行い，第３回班を終了した。以下は，全員発言運動が終わった際と，第３回班を解散する前の班長会メンバーの振り返りの一部である。

表２　班長会メンバーの振り返りの一部抜粋

	全員発言運動を終えた後	第３回班を解散する前
男子	・無事に全員発言運動は目標枚数をクリアできたのでよかったです。さらに10枚とパーフェクトにできてよかったです。**発言がまだできていない人を気に掛け，励ますことができました。**修学旅行でも全員発言運動のように協力したいです。	・バスや船の中でのマナーを守り，うるさくせずに過ごせたのでよかったです。班長として点呼や状況を把握することを重視しました。**班員のみんなが点呼のときにすぐに集まってくれたのでうれしかったです。**

女子	・今週で全員発言運動が終わったけれど，班のみんなが意識して発言をしようとしていたし，**まだ発言してない人のサポートをすることができました。**結果，毎日全員が発言することができたのでよかったです。	・修学旅行や全員発言運動もあって，**班の協力する力が私はすごく高まった**と思います。バスの座席を決める際や，たらい舟に乗るメンバーを決めるときも，**男女関係なく，積極的にいろいろな人と関わることができました。**

太字の部分は，筆者が「関わり合う」「協力」について記述していると判断した部分である。修学旅行を見据えた「班替え」を行い，全員発言運動に取り組んだことで，子どもたちの協力が少しずつ具体的な行動で見え始めてきた。

(4) 第５回班 マラソン記録会を見据えた「班替え」～マラソンチャレンジ～【９月】

① ねらい：自律の力を伸ばそう。～マラソンチャレンジに力を合わせて取り組もう～
② 班のメンバーの決め方：男子・女子の人数指定のくじ引き。
③ 班長の決め方：班内互選。

第５回班は，10月に控えているマラソン記録会と班活動を連動させることを考えた。マラソン記録会は多くの子どもにとって苦手意識が強く，２学期に入るとすぐにネガティブな発言が聞こえてきていた。だからこそ，苦しいことも，みんなで声を掛け合って乗りこえる機会にしたいと考えた。そこで，第５回班の班長会メンバーの意見を取り入れて，以下のようにマラソンチャレンジの原案を作成した。

〇マラソンチャレンジ① 期間は，９月16日（木）～10月１日（金）までの10日間。
・マラソンカード（全校統一のもの）を活用し，班で合計何マス分走ることができそうか，班目標を立てる。
（グラウンド１周で１マス，マラソンコース１周で10マス色をぬることができる。）
・班で目標マス数以上走ったら，マラソンチャレンジ①クリア。
〇マラソンチャレンジ②
・コース試走のタイムをもとに，一人一人が本番の目標タイムを設定する。
・班のメンバーの目標タイムを合計し，班の目標タイムを設定する。
・マラソン記録会を終えて，班のメンバーのタイムを合計する。
・班の目標タイムを切ることができたら，マラソンチャレンジ②クリア。

学級会では取組内容は修正案なしで可決された。班で目標記録を決める際は，自分の昨年度の記録を参考にしながら，前向きに目標を考えている姿が見られた。マラソンチャレンジの取組が始まると，お互いに声を掛け合って休み時間や放課後にグラウンドに集まり，自主練習に励む姿も多く見られた。

マラソンチャレンジ①の記録を確認したところ，全ての班が目標マス数を越えることができていた。そして，本番のタイムを集約したところ，３つの班は目標タイムを切ることができたが，１つの班だけが目標タイムを切ることができなかった。マラソン記録会を終えた後の子どもたちの振り返りは，以下のとおりである。

表３ 児童の振り返りの一部抜粋

女子	・昨年までは「しんどい」「きつい」「やりたくない」とネガティブな気持ちが強かったけれど，今年は不思議と「よし，やろう！」とやる気が出ました。それは，**練習に誘ってくれた班の仲間のおかげ**だなと思っています。今年は，**班の仲間のおかげで意欲的に取り組むことができたので，班の仲間に感謝**です。
男子	・「一人で頑張る」ことには限界があり，**「みんなで頑張る」と楽しい**ことが分かりました。最初は「このチャレンジ達成できるの？」と思っていたけれど，**みんなと練習していくうちに，どんどんと「頑張るぞ！」という気持ちになっていって，これが協力するということなのかなと思いました。**

太字の部分は，「関わり合う」「協力」についての気付きを深めていると筆者が判断した部分である。チャレンジはクリアできなかったが，ネガティブなイメージをもちやすいマラソン記録会を，みんなで前向きに乗りこえることができたと感じた。

(5) 第７回班 ２学期チャレンジテストを見据えた「班替え」～チャレテスチャレンジ～【11月～】

① ねらい：みんなで教え合い，チャレンジテストで高得点を目指そう。～チャレテスチャレンジ～
② 班のメンバーの決め方：班長会が班のメンバーについて原案を作成し，学級会で提案する。
③ 班長の決め方：立候補制。（定数以上の立候補があった場合は，所信表明をした後に投票を行い，決定する。）

勤務校では，学期に１回「チャレンジテスト」という国語と算数の学年テスト（90点以上合格）を行っている。子どもたちのチャレンジテストへの思い入れは強く「一回で合格したい。」「100点を取りたい。」という声が挙がることが多い。その一方で，学習が苦手な子どもにとっては，やる前から諦めてしまう姿も見られていた。そこで，「チャレテスチャレンジ」を通して，班のメンバー同士で教え合ったり，一緒に学習を進めたりする機会をつくり，クラス全体でチャレンジテストに前向きに取り組みたいと考えた。チャレテスチャレンジの概要は以下のとおりである。

・個人でチャレンジテストの目標点数を決める。（国語と算数を合わせて200点満点）
・個人のチャレンジテストの目標点数を合計し，班の目標点数を決める。
・チャレンジテストを行い，班の合計点数が，班の目標点数を越えたらクリア。

今回は，班長会で話し合って班のメンバーを決定したいと考えた。それまでの「班替え」の取組を通して，協力の質が高まってきており，自分本位の気持ちを優先して班のメンバーを決める心配がないと判断したからである。班長の希望者を募ったところ，班長未経験者が２人，経験者が２人の計４人が立候補した。定数内だったので，全員が班長に承認された。取組の期間中は，朝の時間にテストに出そうな問題を出し合ったり，その日の自主学習で取り組んでくる問題を相談したりと，前向きに学習に取り組む姿が見られた。チャレンジテストの結果は以下のとおりである。

表４　チャレンジテストの結果

① 班の目標点数と合計点数	１班	２班	３班	４班
班の目標点数	1147点	1170点	1086点	1159点
班の合計点数	1147点	1163点	1107点	1162点
目標点数と合計点数の差	0	－７	＋21	＋３
② １学期と２学期の比較(学級全体)	国語平均点	算数平均点	国語合格者	算数合格者
１学期チャレンジテスト	90点	94点	19人	19人
２学期チャレンジテスト	95点	96点	23人	21人
１学期と２学期の差	＋５	＋２	＋４	＋２

３つの班は目標点数を越えることができたが，１つの班だけが目標点数を越えることができなかった。達成できなかった２班は，班長を中心に自分たちで予想問題を作成して取り組む等，どの班よりも班のメンバーで声を掛け合って進んで学習に取り組んでいた班だった。チャレンジテストを終えての２班の振り返りは，以下のとおりである。

表５　チャレテスチャレンジ後の振り返りの一部抜粋（２班メンバー）

男子	・２班は，苦手な問題のやり方を**教え合いながら勉強していた**ことがよかったと思いました。**チャレンジテストで出そうなところを話し合ったり，予想問題をつくったりして勉強することができました。**
男子	・目標点数に届かなかったのは悔しいけれど，**分からないところをお互いに教え合って「自分だけ分かればいいや。」ではなく，「みんなで分かるようになろう。」という考え方を全員ができた**のはよかったです。
女子	・このチャレンジをして，班のみんなが全力で取り組む力が付いたと思いました。**Ａさんが，分からないところを自分から聞いてきたので，分かるように教えてあげようと努力しました。班の人が分かるようになったときは，うれしかった**です。
女子	・算数など**自分が分からないところをみんなが教えてくれて**うれしかったです。合格するために，**みんなで取り組めた**ことがよかったです。みんなが頑張っていたので，とてもいい姿だなと思いました。

太字の部分は，「関わり合う」「協力」についての気付きを深めていると筆者が判断した部分である。１学期は，テスト勉強が個人的な取組になることが多かったが，今回の取組を通して「みんなで分かるようになることの大切さ」をクラス全体で確認する機会になった。

５　成果と課題

(1) 成果

以下の表６は，５月末と11月末（チャレテスチャレンジ終了後）に行ったQ-U調査の結果である。今回は，「関わり合い」「協力」という観点に関連する質問項目についての結果を取り上げる。数値は，「４とてもそう思う，３少しそう思う，２あまりそう思わない，１まったくそう思わない」の評価を平均したものである。

表６　Ｑ－Ｕ調査の結果　【各項目の最高値は4.00】

「関わり合い」「協力」に関わる質問項目	５月末	11月末	比較
あなたのクラスは，みんなでなかよく協力しあっていると思いますか。	3.92	4.00	↑
あなたのクラスは，勉強やいろいろな活動に，まとまって取り組んでいると思いますか。	3.88	3.92	↑
あなたが何かしようとするとき，クラスの人たちは協力してくれたり，おうえんしてくれたりすると思いますか。	3.80	3.88	↑

３つの質問項目ともに，顕著な変容ではないが，肯定的な変容が見られた。年間を通して，クラスの課題に沿った取組を行い，その成果と課題を振り返ることを継続してきたことが，肯定的な変容につながったと考える。

また，５月末と３月中旬に，「班替えは６年１組にとって必要だと思いますか。」という質問紙調査を行った。その結果は，以下のとおりである。

表７　「班替え」に関する質問紙調査の結果

「班替え」は６年１組に必要だと思いますか。（５月末）			
4　必要だと思う	3　まあ必要だと思う	2　あまり必要だと思わない	1　必要だと思わない
22人（88％）	３人（12％）	０人	０人
「班替え」は６年１組に必要だったと思いますか。（３月中旬）			
4　必要だと思う	3　まあ必要だと思う	2　あまり必要だと思わない	1　必要だと思わない
24人（96％）	１人（４％）	０人	０人

・たくさんの取組をしてきたことで，**班の人と関わることができた**し，分からない問題があったときに，**教え合うことで協力することができた**から。
・**６年１組の課題をいろいろな人と解決することで，６年１組がよりよい雰囲気になった**し，友情も深まったから。
・マラソンチャレンジやチャレテスチャレンジなどの取組をしたときに，**「自分一人だけじゃなくて，班のみんなも一緒に頑張っているんだ。」と思えた**から。
・**自分以外の人の意見を聞くことで，自分との違いに気付いたり，新しい考えがうまれる機会になったりした**から。
・**自分とは違う考え方を見付けて，受け入れることができるようになった**から。

「４　必要だと思う」という回答が８％向上した。判断した理由をみると，協力することの大切さに気付いている（太字部分）だけでなく，「班替え」が自分と他者の考え方の違いに気付く機会にもなっていた（太字下線部分）ことが読み取れる。「『班替え』を通して，自分にどんな力が付いたと思いますか。」という質問には，協力する力，みんなで取り組む力（８人），誰とでも関わる力（７人），想像力，折り合いを付ける力（３人）という意見が上位を占めた。筆者が年度当初に意図していた「協力」「他者と関わる」「折り合い」というキーワードが，「身に付いた力」として反映されていた。これらは，協力をスローガン的に呼び掛けるだけではなく，「班替え」を通して，具体的に協力できる取組を設定し，話し合い，実践し，振り返るという「自治活動のサイクル」をまわした結果だと考える。

上記の事実から，教師が明確なねらいをもった「班替え」の取組は，１年間の集団づくりの核となり，他者と関わり合いながら，協力して活動する力を高めることに，一定の効果があると判断する。

(2) 課題

「課題を見いだす」場面では，班長会で話し合って原案を作成したものの，教師が示した課題が採用されることが多かった。子どもたちの感じている課題意識と，教師が感じている課題意識をどのようにすり合わせて，学級全体の課題にしていくかが課題として残った。また，６年生で実践した「班替え」の取組を，低・中学年で実践する場合は，どのような修正が必要になるかを考えたい。そして，「班替え」をどの学年でも活用できるような取組に練り上げていきたい。

6　参考文献

荒木俊邦　「関わり合いながら学級の課題を解決していく中で自己有用感を高める集団作り」教育実践研究第30集（2020）
久下亘　「クラスをチームにするための『目的別』席替えのすすめ」月刊学校教育相談，2022年
郷田賢　「子どもたちが生活しやすく，指導が機能する席替え・班替え」月刊学校教育相談，2014年
文部科学省　「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」東洋館出版社，2018年